

革命はカフェから始まる

——フランス革命とカフェ——

今 林 直 樹

はじめに

1. ハーバーマスの公共圏
2. コーヒーとカフェ
 - 1) 飲料としてのコーヒー
 - 2) 自由な場としてのカフェ
3. フランス革命とカフェ
 - 1) オデオン
 - 2) カフェ・プロコープ

おわりに

はじめに

1789年7月14日、パリの民衆がバスティーユ牢獄を襲撃し、フランス革命が発生した。その後10年にわたって破壊と創造のスペクタクルとなったフランス革命。そして近代の幕開けとも言われるフランス革命。フランス革命はなぜ起こったのか。その起源を何に求めることができるのか。この問いに対する答えとしてこれまでも様々な見解が示されてきたが、その作業は、革命発生から200年以上を経た今日においても続けられており、現在進行形である¹⁾。

ところで、フランス革命の起源に関する見解の一つにカフェの存在を指摘するものがある。カフェとは第一義的に「飲料としてのコーヒーを飲む場所」のことであるが、その立場に留まる限りではフランス革命とカフェの間には何の脈絡もないかのように思える。では、カフェがフランス革命を準備し、その展開に大きな影響を与えたというのは、いかなる意味においてであろうか。そして、カフェはどのように革命を準備し、近代の扉を押し開けたのであろうか。本稿では、とくにカフェの機能に注目しながら考えていきたい。

以下、本稿では、はじめに、カフェについて「公共圏」という概念を用いて説明したハーバーマスの見解を紹介する。次に、飲料としてのコーヒーの普及とカフェという場の形成について整理し、最後にフランス革命とカフェについて、フランス最古のカフェとして知られるカフェ・プロ

コープを取り上げて考えていきたい。

1. ハーバーマスの公共圏

ブラニングによれば、フランス革命の起源に関する研究者のうちポスト・レヴィジョニストに属する歴史家たちに、アンシャン・レジームに関する認識の点で最も影響を与えたのは、ドイツの哲学者で社会理論家であったハーバーマスであった²⁾。ハーバーマスは、自身の学位論文でもあった『公共性の構造転換³⁾』という著作の中で、「公共の」という形容詞が用いられる用法について検討し、「公共性」とその現れである「公共圏」、「公衆」とそれによって形成される「公論（世論）」について論じた。以下、本書によりながら、「公共圏としてのカフェとその機能」についてまとめていく。

ハーバーマスによれば、「公的」というカテゴリーの最も頻繁な用法は世論や憤激した公衆、情報に通じた公衆という意味での用法であり、公衆、公開性、公表などと連関する語義であった。そして、その意味での公共性の主体は公論の担い手としての公衆であった。公共性それ自体は一つの生活圏として、そして公論の勢力圏として現れ、私的領域と対立するものである。それは公権力としての国家に対立する契機を含んでおり、例えば、新聞のように公衆の意思疎通に奉仕するマス・メディアが「公共機関」であるのはその現れの一つであった。

ハーバーマスは公衆として集合した私人（民間人）たちの生活圏として市民的公共性という概念を提示する。市民的公共性は公衆としての私人間で公共的論議がなされる場であり、それは小家族の親密な生活圏から始まり、「商品取引が家族経済の境界をつきやぶって出ていく」ことで小家族的内部空間と区画された市民社会—商品交易と社会的労働の領域—の成立へと展開していく。この市民的公共性は文芸的機能と政治的機能を持っているが、文芸的公共性は政治的公共性の前駆をなすものである。文芸的公共性はそれ自身の内部で行われる公共的論議の「練習場」であり、私人が自らの新しい私的存在の直接の経験について行う「自己啓蒙の過程」であった。そこでの論議の対象は商品形態をとり始めた文化であった。公衆は開放された文化的作品に接して読書サロンや劇場、美術館や音楽会などで文化的論議を交わし、文化に対する相互理解を求めたのであった。こうした文化的論議はもともと宮廷において貴族たちの間で展開していたものであるが、そこに参加する機会を得た「教養ある中産階級の市民的前衛」が、宮廷貴族の社交界とのコミュニケーションを通じて公共的論議の技術を習得し、やがて宮廷から分離して都市の中で宮廷に対立する勢力となった。こうして、宮廷的公共性に代わって都市が文芸的公共性となり、カフェやサロン、会食クラブという形で施設化されていった。

夕食会、サロン、カフェの間には、会衆の範囲や構成、交際の様式、議論の雰囲気、主題的関心についての相違があったが、それらはともに「傾向向上は私人たちの間の持続的討論を組織化するもの」であり、ハーバーマスはそれらの中にある「一連の共通な制度的基準」として次の3点をあげている。

第1に、前提としての社会的地位の平等性、あるいは社会的地位を度外視するような社会様式の

要求である。すなわち、カフェやサロン、クラブでは、それらへの参加者である公衆の間に成立する人間関係は公職の権力や権威、あるいは経済的従属関係の上に成り立つものではなく、相互に対等な関係として現れる。そこでは「論理の権威が社会的ヒエラルキーの権威に対抗して主張され、やがて貫徹される」ことになる。

第2に、こうした公衆における討論が、それまで問題なく通用していた領域を問題化することを前提としていることである。それまで教会や国家によって独占されていた哲学や文学、芸術において、資本主義の発展によりそれらの作品が商品化され、市場を媒介として供給されるようになると、それらは商品として一般人にも接近可能なものとなり、その結果としてそれらを独占していた教会や国家がそれまで持っていた権威が、「いまや自律的に、すなわち合理的相互理解によってその意味を深め、談論し、こうして言明することによって。世俗化する」ことになったのである。

第3に、文化を商品形態に転化し、討論可能なものとする過程は、同時に公衆の原理的な非閉鎖性へと通じていく過程でもあるということである。公衆は、読者や聴衆、観客として財産と教養さえあれば、市場を通じて討論対象を入手できるすべての私人から成る、一層大きな公衆の中に身を置き、その中で自己を理解していた。討論にのぼせられる諸問題とそれに接近する道の開放性という2つの「普遍性」により、万人が討論に参加することができたのであった。

さて、上記のような特徴を共有するカフェやサロンといった文芸的公共性は、やがて公権力に対する批判の圏としての地位を確立するに至る。それは文芸的公共性の機能変化として起こったものである。ハーバーマスによれば、政治的機能を持った公共性は、17、8世紀のイギリスにおいて初めて成立するのであり、彼によればそれは大陸ヨーロッパの諸国に対して「モデルケース」となるものであった。ではまずイギリスのケースについて確認しておきたい。

イギリスでは国家権力がくだす決定に影響を及ぼそうとする諸勢力が、論議する公衆に呼びかけ、この新しい審判者から諸要求の正統化を取りつけようとした。そして、前述のとおり、公衆が論議する場こそカフェであった。ハーバーマスは、すでに17世紀の70年代に、イギリス政府はカフェでの論議が引き起こす危険に対抗する布告を出す必要に迫られており、カフェは政治不安の発生源とみなされていたと記している。ところで、公衆によって論議された事柄は新聞や雑誌などのメディアによって広く公開された。文芸的公共性においてそれは「批評」であったが、政治的公共性においてそれは「批判」であった。18世紀前半のイギリスでは政治家や政党によってマス・メディアが利用され、マス・メディアを媒介した主義主張の表明によって「党派精神」が「公共精神」となっていくのである。政府系の新聞とともに「野党の公論的舞台」となる新聞や雑誌が生まれ、後者の紙上で政治批判が展開されたことにより、「はじめて新聞が本当に、政治的に論議する公衆の批判的機関となり、『第4身分』となる」のであった。こうして、公衆によって持続的に論議され、公開された「批判」はやがて議会の閉鎖性を打破し、議員たちにとってももはや無視することのできない「公論」へと昇華していくことになる⁴⁾。

以上が、イギリスにおける政治的公共性の形成に関するハーバーマスの見解である。続いて、ハーバーマスは、フランスとドイツを取り上げて両国における政治的公共性の形成について述べている。本稿における関心という点から、フランスにおける事例だけを取り上げたい。ハーバーマス

によれば、フランスで政治的に論議する公衆が発生したのは18世紀半ば頃であった。しかし、フランス革命以前において、公衆はその批判的衝撃力を、当時のイギリスで可能であったようには有効に制度化することができなかった。当時、絶対王政下にあったフランスには検閲はあったが、発達したジャーナリズムがなく、国民代表へと向かう身分制議会もなかったからというのがその理由である。18世紀の前半、フランスにおける「哲学者」たちの批判は主として宗教、文学、芸術に向けられており、その点ではフランスの市民的公共性は文芸的公共性に留まるものであったが、やがて彼らによって「百科全書」が公刊される段階に至って、彼らの道徳的志向が初めて政治的志向へと発展するようになった。ハーバーマスは百科全書について、それが「大規模な公論的企画として設計されたもの」であり、ロベスピエールがそれを「革命の序章」として讃えたというエピソードを紹介している。続けて、ハーバーマスは政治的に機能する公共性が絶対主義体制へ突入するための突破口を切り開くことに初めて成功したのはネッケルであるとし、公衆の政治的論議が政府監査の審廷としての実力を発揮したと述べている。そして、フランスにおける政治的公共性の形成について次のように記す。「経済的にも政治的にも機能を失いながら社会的には具現的なお抱え貴族社会の中から、上昇した知識人たちの援助のもとに養成されてきた公衆の圏は、ついに政治的にも論議する公衆の圏となって、今や決定的に、市民社会が自己の利害関心を反映的に表現していく圏になるのである。」さらに、クラブの諸党派が形成され、日刊の政治新聞が発行されるなど、政治的公共性の制度化が進行していくのである。ハーバーマスがはっきりと例示しているわけではないが、その制度化の事例の一つがカフェであったことは、これまでの彼の議論の展開から明らかであろう。

2. コーヒーとカフェ

1) 飲料としてのコーヒー⁵⁾

フランスに飲料としてのコーヒーが伝来したのはルイ14世治下の17世紀半ばのことである。コーヒーはマルセイユの商人で旅行家であったラ・ロックがオスマン帝国滞在中にコーヒーの味を知って持ち帰ったとされる。マルセイユで普及したコーヒーは、その後、リヨン、ディジョンを経てパリにも伝わり、消費の中心となっていく。当時、飲料として最もよく飲まれていたのはワインであり、コーヒーというこの新来の飲料に対しては主としてワイン業者からあからさまな敵意が示され、それは「コーヒーは身体に有害な飲料である」とする医学的見解となって強調されることになる。しかし、その後もコーヒーの需要は増え、次第にコーヒーを飲むことが流行となっていった。当初、コーヒーの流行を支えたのはフランスの宮廷と貴族社会であった。コーヒーは宮廷や貴族たちによって催される宴会や晩餐会に供されるようになり、それが一種のファッションとなるとともに、コーヒーを飲むことは身体にも良いという主張にもつながっていった。すなわち、コーヒーは身体の不調に対してそれを緩和し、健康を回復させる万能薬であった。そして、頭脳を明晰にするとともに敏活にする効能も挙げられるようになった。やがて、コーヒー豆が商品として販売されるようになると、それをもって「コーヒーを飲む場所」としてのカフェが開かれ始めた。当初

はアルメニア風のカフェが主であったが、1686年、パリ風カフェとしてカフェ・プロコープが開かれるとカフェは時代の変化を象徴する場となっていく。すなわち、客層のレヴァント人からフランス人への変化、店舗の粗末な作りから優雅で美しい作りへの変化、そして居酒屋における飲酒と享楽からカフェにおける洗練されたおしゃべりと社交への変化である。

2) 自由な場としてのカフェ

飯田美樹はその著『caféから時代は創られる』の中でカフェには4つの自由があると述べている⁶⁾。すなわち、居続けられる自由、思想の自由、時間的束縛からの自由、そして振る舞いの自由である。これらはそれぞれがカフェの特徴であるとともに、相互に関連し合っただけでなく、カフェの機能を生み出すものともなっている。居続けられる自由とは、コーヒー1杯の値段を支払えば何時間でもそこに居続けられるということであり、それはカフェにいる誰もが対価を支払ってそこにいるという点で平等な人間関係を含意するものである。したがってそれは既存の社会的秩序には拘束されないものであった。思想の自由は、カフェでは何物にも拘束されない自由な議論ができるということと同義であろう。それは「議論によって育まれる共有知」⁷⁾の形成という主張へと展開するが、ハーバーマスの言うならば、「政治的公共性としてのカフェにおける公共的論議を通じた公論の形成」ということになるであろう。飯田はカフェの持つこうした思想の自由性にサロンとの本質的な違いを見出している⁸⁾。飯田によれば、サロンはそれを主催する女主人と参加者との関係が制約となり、自由な議論の妨げとなっていた。そして、時間的束縛の自由とは、第一義的にカフェが朝早くから夜遅くまで開いているということであり、振る舞いの自由とはカフェでは行動の自由が許されているということである。飯田が考察の対象としている時代は20世紀前半であり、厳密に言えば上記4つの自由を有していたのもその頃のカフェということになるが、筆者は「自由な場としてのカフェ」はフランス革命の前後には現れつつあったのではないかと考える。「自由な場」としてのカフェは、単に「コーヒーを飲みに行くための場」ではなく、(言葉では表現しにくい)「それ以外の何か」を求めて通い続けることができる場であり、そこでの人々の交流の結果として「何かの種が捲かれて芽を出し」、そして「何かが生み出される場」となっていくのである。

3. フランス革命とカフェ

1) オデオン

最後に、フランス革命と最も関わりの深いカフェを紹介しておきたい。1686年にイタリア人のプロコピオによって創業されたカフェ・プロコープである。プロコープはパリ第6区オデオン地区のランシエンヌ・コメディ通りに位置しており、一時は閉店していたが、フランス革命200年を記念して店を再開し、現在もレストランとして営業を続けている。

ここでは、カフェ・プロコープについて紹介する前に、はじめにオデオンというフランス革命の記憶が色濃く残る地区について触れておきたい。オデオンに残るフランス革命の記憶の中でその筆頭はダントンであろう。メトロのオデオン駅にはダントンの像(写真1)が立っているが、ダント

ンは、フランス革命発生後の1789年9月、オデオンのあるコルドリエ地区の議長となった。カフェ・プロコップの裏手にあるコメルス・サンタンドレ通りに居を構え、カフェ・プロコップの常連であった。1790年4月にはコルドリエ・クラブを結成した。メンバーにはデムーランやマラー、そして急進派のエベールなどがいた。また、ジロンド派内閣においては司法大臣を務めている。ダントンは弁護士であったこともあり弁舌に優れ、いくつか記憶に残る演説を残している。例えば、1792年9月3日、立法議会において「祖国の敵を打倒するためには豪胆さが必要であり、その上にさらに豪胆さが、そして常に豪胆さが必要なのである（*Pour vaincre les ennemis de la patrie nous faut de l'audace. Encore de l'audace et toujours de l'audace.*）」と演説したが、この演説は対外戦争を進めていたフランス軍がヴェルダンで敗れた翌日に行われたものであり、「豪胆演説」として知られている。また、1793年8月15日には、国民公会において「パンの後には、人民にとって何よりも必要なのは教育である（*Après le pain, l'éducation est le premier besoin du peuple.*）」と演説している。マラーやロベスピエールと並んで革命の指導者として大きな影響を与えたダントンであったが、その後、国民公会のもとで恐怖政治が展開する中でロベスピエール派と対立し、逮捕、処刑された。1794年4月5日のことであった。



(写真1) オデオンのダントン像

2) カフェ・プロコープ

前述のとおり、プロコープは、1686年創業のパリのカフェである（写真2、3）。先に、プロコープはランシエンヌ・コメディ通りに位置すると記したが、通りの名前はプロコープの開店に前後して店の真向かいに移転してきたコメディ・フランセーズに由来する。このことが幸いしてプロコープはコメディ・フランセーズ関係の人々が大いに利用するところとなった。例えば、その中には俳優は言うまでもなく、劇作家やヌヴェリスト（情報家）、文人、粹人、徴税請負人などがいた⁶⁾。彼らはプロコープで文学や演劇について大いに語り合った。すなわち、プロコープはハーバーマスの言う文芸的公共性となったのであった。その後、話題は文芸的なものから政治的なものへと波及していき、プロコープは政治的公共性となっていったのであった。それがいつのことであったかはわからないが、プロコープの常連客に思想家のルソー、百科全書派のディドロやダランベール、そして革命の指導者となったダントンやマラー、ロベスピエール、そして米国のベンジャミン・フランクリンなどがいたことを考えると、やはり18世紀後半にはプロコープは政治的公共性となっていたことが推察される。



（写真2） プロコープ



(写真3) プロコップ

すでに確認したように、政治的公共性としてカフェをとらえるとき、カフェは単にコーヒーを飲みに行く場所ではない。客の目的はコーヒーそれ自体ではなく、むしろそれ以外の何かにあった。そして、それはカフェに「通う」ことによるのみ得られるものであった。飯田美樹は前述の著作においてカフェに「通う」ことの重要性を指摘している。先にみたように、客は単にコーヒーを飲むためのみカフェに行くのではなく、「メニューには明示されない、カフェという空間に内在する多くのものを目当てにカフェに通っている」のである。客にとってプロコップはまさに「コーヒーを飲むこと以外の何か」を得られるカフェであった。ダントンは演説をする前にはプロコップでコーヒーを飲んでから行ったとも言われているが、それは頭脳を明晰にするというコーヒーの効果を期待してのこともあったであろうが、もちろんそれだけではなかったはずである。プロコップに通い、論議を重ねることで得たそれ以外の何かがあったであろう。そして、そうして得たものが演説の中に反映したであろう。思想家のルソーはサロンにも招かれるほどの人物であったが、彼自身は女主人との関係に拘束されるサロンを嫌い、自由な議論の出来るカフェを好んだという。また、ディドロやダランベールはカフェに通ったからこそ、そこでの論議を経て、ロベスピエールの言う「フランス革命の序章」ともなった百科全書が生まれたのである。

おわりに

これまで確認してきたように、カフェは、18世紀のフランスにおいて政治的公共性として「近代」という新しい時代の幕を開ける役割を果たした。繰り返しになるが、カフェは単にコーヒーを

飲むためだけの場ではなく、そこに行けば「何かを得られる場」であり、「新しい何かが生み出される場」であった。18世紀後半のフランスはブルボン王朝の治世においてアンシャン・レジームに由来する諸問題が国家と社会という公共の舞台において公の認識するところとなり、それはやがてフランス革命となって現れる。フランス革命そのものは国家と社会をカオスの状況へと引きずり込んでいったが、カフェという場において継続的に行われた政治的公共的論議は、やがてカオスの状況を新たな秩序へと向かわせる創造力を生み出していった。

フランス革命から200年以上を経て、21世紀を迎えた今日においてカフェはフランス革命当時のような政治的公共性としての性格をもはや持ち合わせてはいない。しかし、今日、我われが置かれている状況はフランス革命前後のフランスほどではないにせよ、今日的な意味で先の見えない不透明なものとなっている。閉塞感と呼んでもよいようなこうした状況において、それを打破するようなエネルギーはどこから生まれると期待できるであろうか。これまでみてきたようなフランス革命当時のカフェが持っていた機能が作り出す文化を「カフェ文化」と呼ぶならば、その機能が今日的に施設化されたもの、すなわち政治的公共性として施設化されたものこそが新しい時代の幕を開ける役割を担うことになるであろう。その任務を再びカフェが担うことになるかどうかはわからないが、「カフェ文化」に関する研究は今日の日本においてこそ必要なものであると思われる。

註

- 1) フランス革命の起源に関する専攻研究は大きく3つに分けることができる。第1に、フランス革命を貴族階級とブルジョワ階級の階級闘争の結果発生したブルジョワ革命とみなすマルクス主義による研究である。第2に、上記両階級における階級闘争を否定する修正主義である。修正主義的研究では貴族階級とブルジョワ階級は本質的に対立する関係ではなく、むしろ貴族のブルジョワ化とブルジョワの貴族化が指摘される。そして、第3に、上記2点以外の様々な視点からフランス革命の起源に迫ろうとするポスト修正主義的見解である。本稿で取り上げる「公共圏」という概念による説明もその中の重要なもののひとつである。
- 2) ブラニング、T.C.W.、天野知恵子訳、『フランス革命』、岩波書店、2005年、43頁。
- 3) ハーバーマスの同学位論文は次のとおり邦訳がある。ハーバーマス、J.、細谷貞雄、山田正行訳、『公共性の構造転換 市民社会の一カテゴリーについての探究』（第2版）、未来社、1996年。なお、この項については、とくに明記しない限り同書に基づいている。なお、訳書中「喫茶店」となっているところは「カフェ」と改訳してある。
- 4) イギリス政治におけるコーヒーハウスについては、次の文献を参照。岩切正介、「政治ゆかりのコーヒーハウス 一昔のロンドンで見ると」、『コーヒー文化研究』第13号、2006年11-24頁。
- 5) この項については、次の文献を参照。岩切正介、「ブルボン王朝下のコーヒーとカフェールイ14世の時代」、『コーヒー文化研究』第5号、1998年、2-18頁。同、「ブルボン王朝下のコーヒーカフェ」、『コーヒー文化研究』第6号、1999年、15-28頁。
- 6) 飯田美樹、『caféから時代は創られる』、いなほ書房、2009年、116頁。
- 7) 同前、265-268頁。
- 8) 同前、130-145頁。

(追記)

本稿は、2013年11月2日、宮城学院女子大学附属人文社会科学研究所の主催したシンポジウム「フランスのカフェ文化—カオスから生まれる創造力」での報告をもとに、加筆修正したものである。